



会員 各位殿

令和元年05月24日

NPOソフトインダストリー研究会

巻頭言

理事長 白石 嘉宏

令和という時代は

現在、アジアやアフリカの国々は毎年素晴らしい経済成長をしています。日本も昭和の後半から平成の初めまではそうでした。ピーク時は世界経済の17%を超え世界第2位でした。今では6%台世界20番目以下です。アジアアフリカ諸国は国民の平均年齢が若く、衣食住家具家電クルマなど、彼らが見たいものだらけです。日本では若者がクルマを欲しがらなくなりました。代わりにスマホでゲームをしています。その上ミニマリストを指向する若者も増えて来ています。

今の経済は物の生産流通消費というモノの流れが把握しやすいので、その節々での金額を補足しGDPとしています。このルールでは人口が多い、モノが足りない欲しがる人が多いところでは経済は活発になります。

若いころは活発に動き回り良く食べ育ちますが歳をとると筋力も活力も衰えますから消費は減って行きます。年寄りに一杯食べさせれば糖尿病高血圧高脂血症になってしまいます。医療関連産業が国の予算の40%になってしまいました、これからはもっと増えて行くでしょう。ということは今までの経済モデルはモノを欲しがらなくなった国民が暮らすこれからの日本には向いていないということです。子供も減りさらにこれからは毎年人口が減り続けて行きます。人口が減るとモノを買ってくれる人が減るから経済は衰退する。というのは現在までの常識です。

でも、それは視点を変えれば今までとは異なる世界が見えてきます。

まず、今の経済は活発なモノ消費をする人口に置いています。国力を高めるには産めよ増やせよという戦中思想と同じです。でも、地球のキャパは限られていますから何時までも人を増やし続けることは出来ません。令和の世、それは減って行く人口を新たな資源と見る時代の到来です。

物事は相対比較です、肩が触れ合うほどの混雑、汚れた空気、汚い水に対してコスタリカが自然を資産に多くの観光客を集めているように日本も蓄積され洗練された文化、四季のある国、恵まれた景観と降雨などにさらに一段と磨きをかけ、要るだけで幸せを感じる事の出来る国に向かう時が来たのです。空き家はお花畑に、休耕田は小動物の牧場に、天国にあこがれるのは皆同じです。

工業商業への投資から国中を天国に替えて行くことに投資する時が来たのです。

密集した都市生活での経済活動ばかりでなく広いところに趣味を楽しむホビービレッジを。

時間を楽しむ産業を育てて行く時が来ています。

令和はGDPからGHP(グロスハピネスプロダクト)を指標にしましょう。

SORUCA 通信 contents

- 巻頭言 /令和という時代は / 白石 嘉宏
- 令和になって / 白石 嘉宏
- スポーツを考える(その2、スポーツと平和、自由、政治、社会) / 坂倉 海彦
- 「見たことしたこと」白石回想録-18 / 白石 嘉宏
- 編集後記 / 渡辺 勝範



令和になって

今月カミングアウトの奥原さんは仕事が重なって大変、それでおなじみ白石が代打です。

平成が終わり令和に入りました、マスコミはこぞって新天皇即位の祝賀報道。お祝い事はさておき、ではこれから始まる令和の世とはどういうことを認識しておかなければならないのでしょうか。ごくごく大雑把に見ると昭和が終わるころはバブルの時代そうして平成はその始末の時代でした。この間、根底では従来の延長線と根本的に異なる地殻変動が進行しました。皆様ご存知の少子高齢化・人口減少です。この変化により安倍首相が誇らしげに語る「失業者が減少しました」というが、新たに職を得た人 100 万人は対老人対応の介護職などです。従来の生産業に入った人はその 3 分の 1 ほど。少子化で目立つのは小学校の廃校・統合合併など。さらに国民が高齢化して人口が減り、共働きが増えると朝からお米を炊いて日本食というライフスタイルが変化します。手間のかからない夫婦の食事、時間が異なっても対応できるパン食に移ります。結果はお米の生産を毎年減らしてゆくことになります。ですから米どころ秋田、青森などを筆頭に農業人口が減り続けます。理由は年 1 回収穫のお米の売り上げでは生活が苦しくなるばかりだからです。ですから子供たちは跡を継いでも暮らせないから仕事が得られる都市部へと向かいます。東京名古屋とその周辺は人口が増えています。日本の食料の根幹である米どころから人口は減って行きます。寿命が延びています。2007 年生まれの子供の平均寿命が 107 歳になるという推計もあります。現在でも女性は寿命を迎える前の 10 年は介護・寝たきりになるとのことですから、これからの成長産業は間違いなく医療と介護になって行くでしょう。現在でも国家予算の 4 割は医療社会保障費です。誰でもが思うことはこのままでは持たない。税金を多くして賄うか、自己負担部分を増やすか、その両方を合わせて行うか。ということになります。「良い天気ですね、どちらにお出かけですか」のご近所挨拶は「悪いところはいかがですか、ご自分で病院に行けますか」に変わって行くでしょう。マスコミ報道では東京など大都市部ほど老人問題が負の要素として取り上げられますがそうではありません、身体が弱った人病気の人というお金を負担する人が増えるのですからこれがさらなる成長産業となるでしょう。AI はこれからこの分野で期待され日本発の高齢化対応プログラム、システム、機器とサービスが産まれるでしょう。そういう恩恵に属することが出来ない地方からは今度は若者に続いて高齢者が都市部に移動してゆくことになるでしょう。

金融は資本主義の血流を促す大切な機能です。ところが現在の金融政策によりこれも根底から揺らぎ始めています。次の号に載せる予定で書いた原稿とダブリますが（9 月発行予定）これは地方経済がさらに弱体化する働きをします。

昭和 47 年（1972 年）工場再配置法が成立しそれまで大都市近郊の湾岸地帯にあった工場

の移転が図られました。現在東京ベイエリアに建っているタワーマンションはがあった場所は嘗ては造船所など工場が群れを成していた場所です。この法律の目的は生産業を地方に移すことに拠り均衡のとれた国の形成を目指そうとしたものです。大都市部と地方の経済格差解消にはそれなりの効果を果たしました。地方に産業が興り働き場所を得て人々が所得を得ることで大都市と地方の格差縮小に役立ちました。

平成の時代、それは自由貿易インターネットと格安航空により一気にあらゆるモノ・コトがグローバル化した時代です。地方への工場移転が今度はもう少し遠くても安価な労働力・安価な土地・安価ですむ設備投資の場所へと移るようになりました。現在躍進を続けているユニクロ、ニトリなどです。この間経済構造も生産型から商業サービス形へさらに金融型へと移行を続けています。こういう変化は今度は地方の経済を弱体化させます。

そこへもってきて現在の金融政策です。皆さんはすでに忘却の彼方となっているでしょうがアベノミクス3本の矢、1本目の大規模な公共投資は政府が勝手にやることですから行いましたが次の民間の設備投資は行われませんでした。バブルを無理やりやめさせるための総量規制を経験した企業は自己資本・自己分析判断で行動するようになりました。

国からなんとと言われようが会社の事業安定継続です。利益を内部留保として積み増して行きます。黒田バズーカは撃ってもマトモな企業は手を出しません。そんな中金利引き下げさらに逆金利です。地方の金融機関は貸出先が見つかりません。この3月期決算地銀の7割が減益または赤字になったと報道されました。日銀は10年後には6割が赤字に転落するとの予想を公表しました。政府は統合基準の緩和を、金融庁は監督指針の見直しを東証市場の上場基準の引き上げを検討することになりました。地方はこれから人が居なくなる、産業が居なくなる、金融機関が居なくなるという状況の進行が懸念されます。均衡のある国の姿という時、次はこういう現実を前提に政策を建てないと実効性の無いものになるでしょう。

時代が変化する時、始めはその変化にほとんど気が付きません。クルマで言えば現在はローギアに入れ車輪が動き出したところですが、ですが巷間2025年問題と言われているように6年後には団塊の世代(1948～1950年生まれ)の人が後期高齢者になります。

セカンドギアに入り加速してゆきます。子供は一段と減り続け、もちろん労働力人口も減って行きます。ということは令和という時代は今までの延長でとかつじつまが合わなくなりそうなところをその都度繕って行くというやり方では無理があるということです。

先に、高齢者が増えればそれに対応した産業が成長すると書きました。

空き家も840万戸になりましたがこれも対応する産業が出て来てもおかしくない。

昔、生産力を挙げることにより負の公害が発生しました。水銀中毒・イタイイタイ病・光化学スモッグ等々も、でも今ではこれに対応する産業が出てきたおかげで発展途上の国々から見れば日本は空気も水も素晴らしい国として憧れの国になっています。

あと20～30年後にはそれらの発展途上国だけでなくほぼ世界中が高齢者の国に成長してゆきます。日本は幸い世界に先駆けて高齢化の国に成長しました。

これからの時代先進先端社会制度を整え、サービス、システム、機器など人生を豊かに楽しく明るく暮らせる国に向かう。

令和とは長寿を人々が喜びの中で暮らせるような国造りの時代になって欲しいものです。

スポーツを考える (その2、スポーツと平和、自由、政治、社会)

戦時下などの緊迫した社会ではスポーツと言う文化活動を取り入れる余地は少なく、平和な時代になって初めてスポーツを自由に取り入れる事ができる。スポーツを自由にできる時代、社会というのはそもそも我々人類にとって幸せな時代であるし、スポーツは大げさに言うと平和な時代にしか存在すらできないと言える。おそらく現代人にとって最も大切な世界共通の価値は平和であろうから、スポーツを自由にできるような社会、時代はそれだけで大切にすべき良い時代なのだろう。そういう意味では世界中でスポーツが盛んになってきているとしたらとても良いことだと考えたい。

社会規範を形成する文化とは一線を引く、スポーツのような自発的に参加する文化活動は基本的に個人が自分の意志で参加する自由が認められる社会でしか完全には成り立たない。即ちスポーツは個人の自由が認められる社会という、やはり人類にとって重要な要素と相性が良いと言っても過言ではないだろう。

それでは現実の世界において平和と自由とが十分に実現しているのだろうか。世界には様々な対立があり、平和が永続できる状況にあるとはとても言い切れない。また自由は民主主義社会、自由主義社会ではおおむね実現しているが、途上国などの経済状況が劣る国々においてはスポーツを自由に取り入れたいと思っても実現できない事もあろう。そして社会主義社会や独裁政治体制下ではあらゆる自由が保障されているとはとても言い難い。このような時代にあって世界で共有されている平和への希求と、あらゆる政治、社会思想のパラダイムの中で共有できる範囲の自由とが世界的にスポーツを可能にする空間を作り出していると言える。つまり「自由主義体制と社会主義体制の対立を認めつつなるべく平和を維持しようという政治の意図」と「スポーツを容認できる程度の自由の世界的共有」とが、スポーツを可能にする環境を生み出していると考えてよいのではないだろうか。

このようにスポーツは先ずは戦争のない平和であることが成立条件となるが、この点では政治体制の如何に関わらず戦争回避等への世界的な努力も見られる。然し今世紀になってから世界中で平和を乱す脅威になっているテロリズムに関しては殆どアンコントロールのままで、テロの多くがイスラム原理主義に起因しているが、この点については我々日本人ももっと関心を持つべきではないかと筆者は考える。

2020年の東京オリンピックを前にして、日本ではオリンピックを東京で開くのが当然だという雰囲気がある。然し東京開催が決まった2013年のアルゼンチン、ブエノスアイレスでのIOC総会の直前までは2020年のオリンピック開催に立候補していた3都市(イスタンブール、東京、マドリード)の中で東京は決して本命でなかったと言われていた。その理由はオリンピック開催都市の歴史とオリンピックの理念を考えるとよくわかる。20世紀後半

以降のオリンピック開催地には、第二次世界大戦後に立ち直った国々や経済力をつけてきた

国々の都市と先進諸国の都市が代わる代わる選ばれてきたが、これはオリンピック運動がスポーツを通じて世界が仲良くし、国際平和をもたらそうとする理念を持っていたためと考えられる。例えば1964年の東京、68年のメキシコシティ、80年のモスクワ、88年のソウル、08年の北京、16年のリオデジャネイロなどは前者の例で、それらの都市と国はオリンピック開催を機に国際社会の一員としてはっきり認められたのではないだろうか。2013年時点でオリンピックをまだ開催していなかった世界は中東やアフリカしかなく（その多くはイスラム圏）、そのエリアでオリンピック開催能力を持つ都市はイスタンブールだけだった。当然次はイスタンブールという声が多かったのは不思議ではない。然しトルコのスポーツ選手のドーピングがあまりにひどいという批判が多く、結果として東京の開催に決まったのではないかとされている。非常に分かりやすい話だ。

そしてもし2020年オリンピックが東京でなくイスタンブールになっていたらその後の世界はどうなっていたのであろうか？悲観的な見方をするとオリンピックの誘致くらいでイスラム世界や中東情勢が変わるわけではなく、その後の混乱の激化により20年オリンピックそのものの開催すら危なかったという事になる。反対に希望的な見方をすると、イスタンブールオリンピックで中東やイスラム社会が国際社会の間での地位を向上し、その後のテロ行為などが無くならないまでも多少は減少したのではないかとも考えられる。オリンピックにそこまでの期待をするのはどうかとも思うが、その一方でスポーツにそのような平和へのパワーを期待することは決して悪い事ではないはずだ。

もう一つの自由という要素について筆者が近年気になるのが、様々なスポーツ種目において自分の意志などあろうはずもない幼少期から開始しないと一流の競技者になれない、という現実が広く知られるようになり、この点についての議論を誰もしようとしないうことだ。勝ち負けだけでスポーツを捉え、自発的にやる文化としての面を忘れるとスポーツが国威の発揚や民族対立をあおり、平和を希求するというパワーを弱めかねないと思う。

スポーツは競技であれ、レクリエーションであれ平和な時代に、自分の意志や欲求で行い、様々な意味の幸せを生み出す文化活動である。従って基本的人権が認められる社会では、スポーツに参加する権利が平等に与えられる。そしてそのような国や社会では人々のスポーツをする権利を認め、スポーツを促進する行政などの対応を制度化、法律化している。この点日本は出遅れていたが平成23年(2011年)にスポーツ基本法を制定しており、その内容はスポーツを世界共通の人類の文化と位置づけ、スポーツの基本理念としても確かな捉え方をしている。競技での勝ち負けを競うだけでなく、人生の中に様々な形でスポーツを取り入れていく成熟した社会へと令和の時代に世界が進化していく事を期待したい。

(坂倉 海彦)



「見たことしたこと」白石回想録—18

前回の号で齋藤さんと奥原さんの出会いを書きました。今回の号では始めに今も私を支えてくれている他の3人の人をここで紹介させていただきます。まず初めの方は1983年にカナダ北米への視察を行いました。私はこの視察ツアーの後に出会ったと思っていたのですが菊地実さんによると私が未だ髭を生やす前の1979年に出会っていたとのことでした。それはさておき翌年の1984年には電通経由で余暇開発センターに出向してもらい当時のやはり言葉だったニューメディアを担当してもらうことにしました。巷では電話回線で情報を送ることが出来るNTTのINS（一体何をするのでしょうかという悪口もありました）テリドンが紹介され新しい情報時代が迫っているということをいやでも感じる流れになっていました。通産省ではコンピューターを使つてのCGなど積極的に進めていましたが通信は郵政省の管轄です。コンピューターと通信が一体となる（今ではインターネット）のは時間の問題です。そこで通産省から何か考えろというご指示を受けました。何か考えると言ってもこの分野の進展は早くある部分に特化したテーマを設定するのは危険としました。そこで調査事業名を「情報産業基盤整備事業」とし、何をやっても良いようにしました。菊地さんからは基盤整備事業とは建設省の仕事のようだとおっしゃいましたが、フリーハンドが一番動きやすいのでこの名前で行うことにしました。当時NTTでは銀座電話局に200台ほどのビデオデッキを置き霞が関ビルのショールームから観たいソフトをリクエストすると200の中から好きな映像が高速回線で送られ見ることが出来るようになっていました。通信と動画も一緒になるのも目の前です。そこでもともとCG系に詳しい菊地さんにはその分野を、私は映像の方に回りました。映画ではアメリカのアカデミー賞がありますから私が特に主張したのがテレビ番組の取引の市場を日本に設けるということです。84年にはテレビ番組の見本市は毎年カンヌで行われていましたので此処に日本のブースを出すことにしました。会場は思った以上に盛大でした。その中で日本の映像ソフトは語学のハンディキャップがあります。1986年になると風雲たけし城が始まりますが言葉が判らなくても観ているだけで笑えるという番組が人気でした。此処での私の最大の収穫はカンヌとニースその周りで1週間滞在しフランスのリゾートとそこでの過ごし方に触れたことです。さて、話を元に戻して、1983年の秋にはカナダアメリカ視察ツアーのメンバーを发起人としてMINTS（メディアビジネス研究会）が発足翌年の予算を見越してAVA（オーディオビジュアルエイジ）という組織を作ることを目標に活動を始めました。菊地さんをチーフに実際に最も多く人と情報を提供してくれたのは電通でした。AVAは85年から日本名を国際映像ソフトフェア推進協議会として活動を始め91年の3月31日に一度解散しますがその後はマルチメディアソフト振興協会、日経ニコグラフ、HVCハイビジョン支援普及センターと合流し現在はデジタルコンテンツ協会になっています。菊地さんは

電通の {情報メディア白書} や総務省からもこの分野の白書の製作依頼を受けて作っています。菊地さんについて特筆したいのは現在彼は株式会社メディア開発総研の創立者ですが「天保銭」という会報を出しています。これを観ると彼の教養の深さを感じさせられます。多分この手の人は今のネット社会では今後出てこなくなるのではないかと思っています。天保銭推薦です。

私は時代に流され続けています。次はリゾートの時代です。1987年バブルが始まります国は「総合保養地域整備法」を成立。所謂リゾート法です。菊地さんの紹介者を通して私は経団連のリゾート委員長に就任しました。当時製鉄業は不振でした、新日鉄からは余暇開発センターに北村智康氏が出向してきてくれました。経団連では私は異星人でした。当時経団連メンバーの主体は重厚長大企業です。リゾートというと出来てからの運営よりも土木建築に目が向きます。宮崎シーガイア、北海道のアルファトマム、幕張の先のザウスなどの他ほぼ日本中がリゾートを頭にした開発行為に邁進しました。私はここに挙げた3か所はどれも上手く行かないと。たとえば宮崎ではシーガイアがオープンする前に日経後援で現地セミナーが開かれ私は講師として呼ばれました。講師は当然素晴らしいものが出来た成功間違いなしと話すだろうと思っている聴衆の前で私はこれは失敗するとの講演をしました。カンヌやニースのリゾートのコンセプトとは似ても似つかないものだったからです。説明すると長くなるので端折りますが、先ず発想が温室風巨大プールです。だから「泳ぎに来る」人からお金を払ってもらうという収支計算です、カンヌやニースでは水着やトップレスの女性は借景です。その女性たちが居ることその場がどういう雰囲気になるのか、その雰囲気からどういう派生商品・サービスを生み出してゆくのか。という発想が全くない。そんな話ばかりしていたので1期2年間で首になりました。新日鉄では北九州にスペースワールドという施設を作りエンターテイメントと教育を合わせたエデュターテイメントという造語で遊びながら学べるというのがコンセプトというのを作りました。出向してくれた北村氏はこれは上手く行かないと理解しその後アメリカの会社に転職しました。

このバブル盛りの頃松下電器も90年に大規模プロジェクト推進室を設けその中に現在まで私をおんぶにだっこで支えてくれている 当会 ソフトインダストリー研究会の重鎮渡辺勝範さんと出会いました。彼は慶応大学吉祥寺育ちの紳士です。環境デザイン室長の川上嘉彦さんの紹介です（この人も素晴らしい人ですが紙面が無いので失礼）。

当時松下電器と松下興産は都市開発とリゾート開発の両方に力を入れました。夕張の開発、妙高パインバレーのゴルフ場、和歌山のマリーナなど手広く。そんな中渡辺さんはつましく控えめに自分の身を処していました。良い人に出会いました。実際この会は彼が居なければ動きません。

もう一人はこの文字だけの原稿を渡すと2時間ほどで会報に仕立ててくれる 長谷川毅さんです。彼は多摩美術大学(立体科)のあと当時ハリウッドの3rd STREETにあるアートセンター・カレッジ・オブ・デザインを卒業しその後銀座の和光のウインドウディスプレイや万国博覧会など半分以上を手掛けていた商工美術(今はありません)の常務でした。同じ年の生まれで銀座2丁目生まれの東京育ちなので時代背景が一緒です。

だからプロポーザルなど何も言わなくてもすぐに作ってくれます。今期から表紙の下の私の似顔絵イラストも年相応に変えてもらいました彼の年齢でアドビのイラストレーターを使いこなす人はほぼいないと思います。

同じ年の生まれで東京育ちなので時代背景が一緒です。

このように私は人の運に恵まれて生かされています。能力なくても友人力です。

だから私が最初にあの世に行かないと悲惨なことになります。

< 編集後記 >

元号が新しくなり、令和の時代になりました。平成の三十年はバブルの崩壊からはじまり、失われた10年、20年のあと、リーマンショック、東日本大震災とつづき、異常気象による豪雨被害が毎年起こっています。人の幸せの基準や生き方に対する警告を何度も受けているにも拘わらず、考えることを放棄し、先のばししてきたのです。新しい令和の時代には、“楽しさ”よりも“うれしさ”を求めましょう。そしてうれしさが生き方の基準になると、「美しさ」が価値基準の中で重きをなします。大転換のこの時、美しさのレベルを磨きましょう。（渡辺勝範）



「特定非営利活動法人ソフトインダストリー研究会」
SORUCA 通信 (2019年 春号) 広報誌

発行責任者 白石 嘉宏
発行所 NPO ソフトインダストリー研究会
東京都新宿区矢来町 47 番地
FAX: 03-3266-1764
<https://soruca.org/>
編集人 渡辺 勝範・長谷川 毅
発行日 2019年05月24日



発行元 :NPO ソフトインダストリー研究会